

2019年度

2月1日 午後

特待入試

国 語

(50分)

注 意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は□一から□三まで、17ページにわたって印刷してあります。
- 3 解答の下書きが必要なときは、この問題用紙の余白を利用しなさい。
- 4 解答用紙には、受験番号と氏名を書きなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙に書き、解答用紙を提出しなさい。
- 6 句読点、記号は字数に数えなさい。
- 7 本文中には、問題作成のために省略や表現を変えたところがあります。

かえつ有明中学校

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「好きなことをしよう」と言われることが多くなった。キャリア教育というのが急に盛んになってきて、嫌々仕事を  
人生なんてつまらない、そんなんじゃ仕事を乐しめないから、好きなことを仕事にしようなどと言われる。

そう言われても、好きなことって何だろうというところでつまずいてしまう。そんなことはないだろうか。

好きなことが何もないのかと言われれば、そんなことはない。野球が好きだ。ポップスが好きで、だれだれのファンだ。

鉄道が好きで、鉄ちゃんのネットにはまつてる。だからといって、それが仕事になるとは思えない。あまりにア現実的だ。  
どうも大人たちの言うことはメチャクチャだ。僕は、年齢的にいえばとんでもなく大人なんだけど、つくづくそう思っ  
まう。

好きなことで仕事になりそうなことって何だろうか。そんなことをいくら考えたって無駄だ。それがほんとうに好きかな  
んて、本気で打ち込んでみないとわからないからだ。部活だって趣味だってそうだろう。面白そうだって思ってた  
やっているうちに「ちょっと違うな」「自分には無理」っていう思いが込み上げてきて、結局イにやめてしまう。  
そんなのは、じつによくあることだ。

それに、どんな仕事だって、やってみると「意外に面白いな」と思うことがある。はじめはできなかったことができるよ  
うになってくると、何となく楽しくなってくる。好きなことを仕事にしないと仕事を乐しめないなんて、そんなのは大きな  
勘違いだ。

「自分にしかできないことをしよう」なんて言われることもある。そんなことができたらかッコいいなとだれもが思うは  
ずだ。自分もそうしたいと思うだろう。思うまではいいのだが、そこから先に進めない。

「自分にしかできないこと」をしたい。それは、本気でそう思う。それなのに全然先に進めない。なぜなのか。それは、  
「自分にしかできないこと」というのが、いったい何なのか分からないからだ。まったく見当もつかない。

それは当然だ。まだ実社会に出ていないし、人生の <sup>A</sup>序盤じよばんを生きただけなのだから。自分にできることが何なのか。できないことは何なのか。そんなことは、いろいろやってみないうちからわかるわけがない。この先さまざまな経験をすることで、「自分にできること」や「自分にはできないこと」が見えてくる。また「自分にできること」が増えてくる。そうしているうちに「自分がやりたいこと」や「自分にしかできないこと」が徐々に見えてくるものだ。焦る必要はない。というよりも、今からそんなことまでわかったら、人生の謎解きなぞとができちゃったみたいで、この先の人生のワクワク感がなくなり、つまらない人生になってしまうのではないか。 <sup>②</sup>もう少しじっくり楽しんでいいだろう。結局、どうしたら「自分らしく」生きられるのかということは、考えれば考えるほどわからなくなってくる。では、どうしたらよいのか。それは、この本のテーマでもあるので、じっくり考えていくことにしよう。

小学校の頃から友だちと自分を比べることはあったし、友だちのほうがよくできるのを羨ましく思うことはあったけど、この頃そういうことが多くなった。何かにつけて友だちと自分を比べては、自分の劣おとっている点が気になり、気分が落ち込む。そんなに深刻に落ち込むっていう感じではないのだけど、何だかイヤな気分になる。そんなことがあるだろう。

思春期になると、だれもがそんな感覚に苛さいまれるようになる。じつは、大人も何かと人と自分を比べて羨んだり落ち込んだりしている。 <sup>③</sup>こうした比較意識ひかくからは、僕たちは一生逃にげられないようだ。

ただし、大人になり、人生経験を積むにしたがつて、比較意識による気持ちの落ち込みを適当にごまかせるようになる。人によつては、比較による劣等感を成長のバネにすることさえできる。

でも、まだ人生経験の乏とほしい青年期には、比較によって生じる劣等感は、大きなダメージになりがちだ。

だれとでも打ち解けて喋しゃべることができる友だちと比べて、自分はなんでもまく喋れないんだろう、なんで気をつかつちゃうんだろうといった意識が強すぎると、対人場面で緊張するようになり、友だちに気軽に声をかけられなくなる。

友だちと比べて運動神経の鈍にぶい自分を意識しすぎると、みんなで球技をして遊ぼうというようになると、みつともない姿をさらしたくないという思いから、ちょっと都合が悪いからと、口実Iをつけて逃げるように帰ってしまう。

比較意識というのは何ともⅡ厄介やっかいなものだ。他人はそこまで人のことを気にしていないはずなのだが、自分のほうが強烈に気にしてしまう。何でそんな厄介なものをもってしまうのか。それは、だれでも自分を知りたいからだ。

人と比べることの背後には、自分を知りたいという思いがある。人と比べることを心理学では④社会的比較社会的比較というが、これは自己評価の重要な指標あたを与えてくれる。

例をあげて考えてみよう。

自分は足が速い。自分は背が高い。自分は太っている。自分は引つ込み思案じあんだ。自分は勉強が苦手だ。これは、よくありがちな自己評価の例だが、こうした自己評価は、どのようにして形成されるのだろうか。生まれつきもっているわけではない。経験を通して徐々につくられてきたもののはずだ。

授業や運動会で駆けつこをするたびにみんなより速いことが多かったり、鬼ごっこでなかなか捕まらなかつたりすると、「自分は足が速い」という自己評価をもつようになる。

クラスの中で自分より背の高い人が少ないと、自分は背が高いんだという自己評価をもつようになり、自分より太っている人があまりいないと、自分は太っているという自己評価をもつようになる。

授業中にクラスの人たちがみんなB積極的積極的に手をあげるのに、自分は間違つたら恥ずかしいとほとんど手をあげないということになる、自分は引つ込み思案だという自己評価をもつようになる。

クラスの中に自分より勉強ができる人がたくさんいて、自分よりできない人を探すのが難しいということになると、自分は勉強が苦手だという自己評価をもつようになる。もし、もっと学力レベルの低い学校にいたとしたら、自分は勉強は苦手だという自己評価をもたなかったかもしれない。

このように、僕たちは社会的比較によって自分の特徴とくちょうを知ることができるのだ。人と比べてもしようがない、人との比較なんかにこだわる必要はない、自分らしくあればいい、などと言われることがある。でも、自分が劣るおとことがあっても落ち

込まないようにすることが大事なのであって、人と比べること自体が悪いわけではない。何しろ、「自分らしくあればいい」なんて言われても、人と比べないと自分の特徴が浮かび上がってこないのだから。

「A君は、なんであんなふうに受けとるんだろう」と疑問に思うとき、A君とは違う感受性をもつ自分がどこかで意識されている。

「B君はあんなこと言うけど、僕はそれには賛成できないな。そういう考え方はイヤだな」と反発を感じるとき、B君とは異なる価値観をもつ自分をそれとなく感じている。

「C君は何のこだわりもなくて羨ましいな。僕は、どうも変なこだわりがあつて損をすることが多い」と思うこともあるかもしれない。でも、ほんとうに羨ましいなら、自分もC君のように変なこだわりを捨てればいい。そうすれば、仲間グループの中で浮くこともなくなるし、先生の言うことに反論して睨にらまれることもなくなるはずだ。⑤でも、それができない自分がある。自分の信念を捨てて調子よく周りに合わせることができない。結局、「羨ましい」という思いもあるものの、「あんなふうにはなれない」なりたくない」というキツパリとした思いが心の奥底おくていに潜ひそんでいるのだ。ここにも自分らしさをつかむヒントがある。

（榎本博明『へ自分らしさ』って何だろう？ 自分と向き合う心理学』より）

問一 好きなことを仕事にしよう<sup>①</sup> と考えたとき、難しいと思われる理由としてあてはまるものを次からすべて選び、記

号で答えなさい。

- ア 今の時代、自分にとって好きなものを見つけることはできないから。  
イ 好きだと思っていなくても、やり始めてから楽しめるようになることがあるから。  
ウ 好きなものがあっても、仕事としてやっていく人生はつまらないから。  
エ 大人から見ても、大人が言うことは時々メチャクチャなことがあるから。  
オ 本気でやってみないと、ほんとうに好きなものかどうか判断できないから。

問二 次の各問いに答えなさい。

(1) ア にあてはまるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 未      B 非      C 不      D 反

(2) イ にあてはまるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 中途半端ちゆうとはんぱ      B 優柔不断ゆうじゆうふだん      C 暗中摸索あんちゅうもさく      D 一長一短

(3) A 序盤 B 積極的 の反対語を漢字で書きなさい。それぞれ同じ文字数で答えること。

問三 もう少しじっくり楽しんで<sup>②</sup> とありますが、どのようなことを楽しむのですか。六十字以内で具体的に答えなさい。

問四 こうした比較意識からは、僕たちは一生逃げられないようだ<sup>③</sup> とありますが、その理由にあたる部分を文中から十

五字以内でぬき出しなさい。

問五 I 口実をつけて II 厄介な の語句の意味としてあてはまるものをそれぞれ後から選び、記号で答えなさい。

I 口実をつけて

ア 予定を変えて

イ 相手をさけて

ウ あらかじめ相談して

エ 言いわけをして

II 厄介な

ア 不吉な

イ わずらわしい

ウ あってはならない

エ 重要なきっかけになる

問六 ④ 社会的比較

について次の各問いに答えなさい。

(1) 「社会的比較」の具体例が述べられているのはどこまでですか。最後の十字をぬき出しなさい。

(2) 「社会的比較」によって得られるものを、文中から「〜こと。」に続くように十五字以内でぬき出しなさい。

問七 ⑤ でも、それができない自分がいる について次の各問いに答えなさい。

(1) 「それ」とは何かを答えなさい。

(2) この表現で筆者が伝えたいことを五十字以内で説明しなさい。



二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

約束した日は、幸い雲ひとつなく五月晴れだった。おきてすぐ縁側から空を見上げた孝和は、早く算額を見に行きたくて高鳴る胸を、やつとの思いでおさえた。

十日前になんとか兄の許しをえたが、柴村先生の命令だからという理由を、ほんとうに信じてくれたのか自信はなかった。だから、兄にはもうこのことを思いださせたくなかった。それで孝和は、いつものようにだまって朝食をすませ、仕事に出かける兄を玄関で見送ってから、静かに屋敷を出発した。

武家屋敷がとぎれたあたりまで来ると、孝和は急に早足になった。じょうぶなわらしをはいてきたので、足もとに心配はない。予備のわらしももってきた。

昼前に目的地に着こうとすると、走りだしたいくらいだったが、がまんした。孝和は遠回りにならないように道を選びながら、ずんずん歩いていった。日差しが強くて、額に汗がにじんだ。

目黒のお不動さまは、八百年以上も昔に夢のお告げでつくられたことで有名だ。お寺の境内はとても広く、いつもお参りの人たちでにぎわっている。

孝和と香奈は、入り口に近い仁王門で午の刻（お昼ごろ）にまちあわせた。お日さまがもつとも高くなる時間だ。

孝和はずいぶん早く着き、仁王門の下で休んでいると、やがて香奈が駕籠に乗ってやってきた。

孝和は立ちあがり、駕籠からおりた香奈に近づいた。香奈はいつもより地味な着物を着ていた。

「あら、内山さま、今日はどうされたのですか」

「先生のご命令で算額を調べに来たのです。ご存じなかったのですか」

二人は ① 申しあわせていた会話をしたが、こらえきれずに笑い声を出したので、近くにいた人たちがいつせいにこちらを見た。はずかしかった。

「お疲れではありませんか」



「いいえ。孝和さまこそ……」

「平気です。でも少しお腹がすきました」

「なにか食べてから見に行きましようか」

「不動堂は、この先の石段を上がったところにあるそうです。先にそちらへ行きましよう」

孝和が元気に歩きだすと、香奈がうしろからついてきた。ならんで歩くのは目立つからだ。

それにしても、嫁入り前の娘が、よく一人でここまで来られたものだ。でも、うしろに香奈がいると思うだけで、孝和は幸せな気分になった。

人の背だけの三倍か四倍はありそうな大きな石灯籠にはさまれた石畳の先に、目的の不動堂があった。そのうしろは高い木々が、屏風のようにびっしりとしげっている。

「なにかうつしている人がいるわ」

横にならんだきた香奈が前方を指さした。

孝和も見つけた。

近づいていくと、若いさむらいが、不動堂の横の壁面にかけられた絵馬のひとつを、何度も見上げては、左手にもった紙に書きうつしているのがわかった。

さらに近よって、さむらいが注目している絵馬を見ると、そこにはひと目でそれとわかる、数学の問題の図形と漢字がならんでいた。

「算額だわ」

香奈がいった。

孝和は ③ 問題の絵と文章を見つめた。

「一辺の長さが二十間（約三十六メートル）の正方形の土地と、同じ面積になる円の直径を求めよ、か……」  
孝和が問題文を読みあげると、書写を終えた若さむらいが、筆を矢立（携帯用の筆入れで墨の入った小さな壺もついでい

る)にしまいがらいった。

「答えは二十二間半(約四十・五メートル)。やさしい問題だ。そろばんがなくても解ける」  
それをきいて香奈がすぐに質問した。

「やさしい問題なですか」

香奈は思ったことはなんでも口にできる。

④「しかし若ざむらいは、孝和のほうを見ていった。

「理屈はかんたんだろう?」

背の高い若ざむらいは、刃物でほったようなととのった顔つきをしていた。声もよくとおった。あとはなにもいわなかった。これくらいは計算できるだろう、ということらしい。なんとなくむかつく態度だった。

香奈は孝和にそつとささやいた。

「土地の面積は二十間と二十間を掛けて四百歩(約一二九六平方メートル。一步は一坪と同じ単位)だから、面積が四百歩になる円の直径を求める問題ね」

「ほんとうに二十二間半になるのかな」

小声でいいながら孝和は、着物の懷から愛用のそろばんを出して計算をはじめた。

円の面積の計算のためには、円周率が必要だ。円周率は円の直径と円周の長さの比、つまり円周の長さは円の直径の何倍かをあらわす数値である。

孝和は、『塵劫記』で学んだ円周率三・一六を使った(このとき、日本ではまだ円周率三・一四は使われていなかった)。

『塵劫記』では、円の面積は、円周率を四で割った数に、直径を二回掛けて計算すると書いてあった。

最後に、円の面積から円の直径を求めるためには、平方根(ある数を二回掛けた数に対するもとの数)の計算も必要だったが、それをそろばんで計算する方法も『塵劫記』に書いてあった。

孝和は頭の中で式を立て、ぱちぱちとそろばん珠を鳴らした。そろばんが得意な孝和でも、少し時間がかかった。答えは、

二二・五〇一七五……間になった。

孝和のそろばんを横からのぞきこんでいた香奈が、顔を上げて若ざむらいを見つめた。口数の少ない孝和のかわりにいった。

「二十二間五尺一分七厘五毛あまりだから、たしかに二十二間半ね」

若ざむらいは少しおどろいたらしいが、視線はまっすぐ孝和に向けられている。

「子どものくせにできるな」

子どもといわれ、孝和は A をかんだ。

「しかし、その答えは正しくない」

「え？」

と香奈が声をあげた。

「円周率が正しくないからだ」

「三一六（三・一六のこと）じゃないのですか？」

「ほんとうの円周率は三一六よりも小さい。だから、正しい値を使えば、直径はもっと大きな値になる」

「ほんとうかしら」

香奈がいくらしやべっても、若ざむらいは無視している。数学のできる女性などいるわけがないと、相手にしていなかったのだ。

「江戸にも算額があるときいておどろいたが、京都や大坂（当時は大阪を大坂と書いた）ではもっとむずかしい問題の算額が奉納されている」

ここで孝和がやっと口を開いた。

「ほんとうですか。この算額の問題もむずかしいと思いますが……。ところで、あなたはどちらから来られたのですか」

「人の素性（生まれや家柄）をたずねるなら、まず自分から名のるのが礼儀ではないか」

そういう相手は、孝和よりずっと年上だ。香奈よりも上だろう。

「これは失礼しました。わたしは幕臣（徳川幕府のさむらい）内山永貞の弟で、内山孝和と申します。こちらのお嬢さまのお父上がわたしの数学の先生で、算額を調べてくるようにいわれて、ここへまいりました」

「ほう、そうか。算額はまだいくつかここにある。数学の勉強にはふさわしい問題ばかりだ。しかし、先生の娘といっしょとはのんきなものだ。それともその娘はいいなずけ（婚約者）か」

「わたくしは、こう見えても数学を学んでいます。父の弟子の一人です」

香奈がきりりといいかえした。

⑤これには若ざむらいもおどろいたようだった。はじめて香奈のほうに顔を向けると、軽く頭をさげてから名のつた。

「拙者（わたし）は、肥前国（今の佐賀県と長崎県の一部）佐賀藩のさむらいで、沢口一之と申します。大坂の蔵屋敷（藩の米や特産物を販売する役所）で御用（仕事）をつとめています、はじめて江戸へ来ました」

「沢口さまも数学を学ばれているのですね」

「いかにも。大坂では橋本正数先生についております」

「橋本先生のところにも女子のお弟子はおりますか」

若ざむらいは、香奈のことばにまた心を動かされたようだ。

「この算額は江戸みやげのひとつとして書写したところですが、もちかえってもよろこんでくれる女子の弟子はいません。大坂には数学をやる人はたくさんいますが、女子は少ない。」  
⑥江戸にはあなたのような……」

「柴村盛之の娘、香奈と申します」

「しばむらもりゆき……？」『格致算書』を書かれた、柴村先生のお嬢さまでしたか」

「父をご存じですか？」

「大坂でも『格致算書』は有名です」

一之の香奈を見る目がかがやいている。しかしそれは、香奈が有名な数学者の娘だと知ったからなのか、香奈が知的な美しさをそなえていたからなのか、孝和にはわからなかった。

それからの二人は、大坂と江戸の数学塾すうがくじゅくの話題でもりあがり、孝和はほとんど聞き役だった。そうしているうちに、楽しそうに話している香奈にみように

「さ、沢口どのは……、御用と数学の両立りょうりつ（両方を大切にすること）をどのようにされていますか」

「両立？」

一之は、まだそこにいたのか、といったいやな顔を向けてきた。

孝和は怒りいかで声をふるわせた。

「蔵屋敷の仕事に、それほど高度な数学は必要ないと思います。しかし、むずかしい数学の問題を解こうとすると、何日も考えつけないといけません。御用にさしかえることもあるわけではありませんか」

兄きょうからは儒学じゆがくと剣術けんじゆつをしっかりと学ぶことを条件じようけんに数学もやらせてもらっている。もしお役につけたら、兄は御用が第一に大切だといって、数学はやめろというかもしれない。

だから、香奈の前で数学者のような顔をしている一之から、御用が第一という返事をききたかった。御用が第一なら数学は第二だ。生意気な一之をとちちめてやりたかった。

ところが、<sup>⑦</sup>孝和の期待は裏切うらぎられた。

「わたしは、どちらも大切です。だからどちらも全力でやります。御用も、生涯しやうがいのをかけて研究する数学も、中途半端ちゆうはんぱな気持ちではできません」

「そ、そんなことができるのですか」

「できないのなら、とっくに数学はやめています」

きっぱりといいきる一之に、孝和は圧倒あつとろうされた。

孝和は、御用と数学のどちらが大切かといえば、答えはどちらかひとつしかないと思いこんでいた。

今でも、儒学や剣術と同時に数学にうちこむことはむずかしい。お役につけたら、好きな数学を思いきりやるのは無理だろう。だから、もし数学を真剣<sup>しんけん</sup>につづけるのなら、お役につくことはあきらめるしかない、とさえ思っていた。

しかし目の前の一之は、両方を選んだと自信たつぷりだ。きつと一之には、数学に一生をささげる覚悟<sup>かくご</sup>ができているのだ。これまで両方を選ばなかった自分が、すぐく弱虫に思えてきた。もしかすると、たった今、香奈からもそう見られたかもしれない。そう思うと、きゆうにみじめな気分になった。

「そろそろ藩邸<sup>はんてい</sup>（佐賀藩の江戸屋敷）にもどらねば……。近いうちに大坂へ帰りますが、機会があればまた大坂であいましょう」

沢口一之は一礼すると、さっそうと石畳をふんで立ちさった。<sup>⑧</sup> 見事なほど背筋<sup>せすじ</sup>がのびていて、そのうしろ姿はかがやいていた。

「凛々<sup>りり</sup>しい方だわ」

<sup>⑨</sup> 香奈の感想が耳につきささった。

孝和はふりかえって算額を見上げた。正方形と重なっている円が、だんだん大きく見えてくる。



とつぜん、一之のことがよみがえった。正しい円周率とは、いったいいくつなのだろう。

（鳴海風『円周率の謎を追う 江戸の天才数学者・関孝和の挑戦』より）

\*孝和…のちの関孝和（一六四〇～一七〇八年）。日本の数学者の第一人者として江戸時代に活躍した。

\*算額…江戸時代の日本で、額や絵馬に和算（日本独自に発展した算数）の問題を記して、神社やお寺に奉納したもの。

\*儒学…中国古代の思想を基本にした学問。礼儀や伝統を重んじており、当時、武士は必ず学ぶべき学問とされていた。

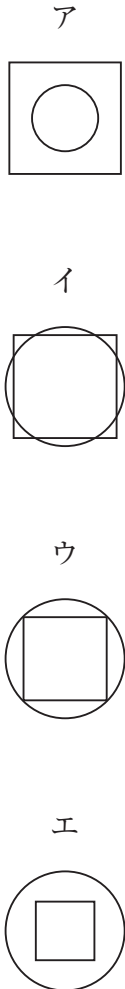
問一 ① 申しあわせていた会話 とありますが、事前にどのようなことを約束していたと考えられますか。あてはまるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 香奈と孝和は出先でわざと偶然に出会ったふりをする、ということ。
- イ 香奈と孝和は出かけることを誰にも言わずに家を出る、ということ。
- ウ 香奈と孝和はお昼前に算額の前で待ち合わせる、ということ。
- エ 香奈と孝和はお昼前に合流してそのまま食事にする、ということ。

問二 ② 幸せな気分 とありますが、このように感じるのなぜですか、あてはまるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 苦手とする剣術と儒学の両方をしなくてすむから。
- イ 香奈と二人で算額を見られることがうれしかったから。
- ウ 香奈と孝和の二人が恋人のような関係になれたから。
- エ 見たくて仕方がなかった算額をもうすぐ見られるから。

問三 ③ 問題の絵 としてあてはまるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。



問四 A・B に入る語として、あてはまるものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 鼻
- イ 口
- ウ つめ
- エ くちびる
- オ 歯
- カ 腹
- キ 指
- ク 背



問五 <sup>④</sup> しかし若ざむらいは、孝和のほうを見ていった とありますが、それはなぜですか。その理由がわかる一文を探し、最初の五字をぬき出さない。

問六 <sup>⑤</sup> これには若ざむらいもおどろいたようだった とありますが、「これ」の指し示す内容としてあてはまるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 香奈が単に数学の先生の娘というだけでなく、その弟子として数学を学んでいるということ。

イ 香奈がただの女性ではなく、大坂でもその名が知られている人物の娘であるということ。

ウ 香奈が見た目の地味な印象とは違って、なんでもはつきり言う女性だということ。

エ 香奈が知的な美人であり、しかもすでに孝和と婚約をしている間からだということ。

問七 <sup>⑥</sup> 江戸にはあなたのような…… とありますが、「……」にはどのようなセリフが省略されていると考えられますか。あてはまるセリフを自分で考えて答えなさい。

問八 <sup>⑦</sup> 孝和の期待は裏切られた とありますが、「孝和」は「一之」がどう答えると考えていたのですか。その理由をふまえて説明しなさい。

問九 <sup>⑧</sup> 見事なほど背筋がのびていて、そのうしろ姿はかがやいていた <sup>⑨</sup> 香奈の感想が耳につきささった とありますが、「孝和」がそのように感じたのはなぜですか。八十字以内で説明しなさい。

問十

C

にあてはまるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア やさしい問題だ。そろばんがなくても解ける

イ 理屈はかんたんだろう？

ウ ほんとうの円周率は三・一六よりも小さい

エ 機会があればまた大坂であいましょう

三 次の各問題に答えなさい。

問一 次の――部の漢字をひらがなに直しなさい。

① 和菓子の老舗。

② きつと本望だろう。

③ 意表を突く。

④ 明日の天気を危ぶむ。

問二 次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 事件のソウサが始まる。

② ガリレオは地動説をトナえた。

③ アタタかな春の日ざし。

④ みかんのシユツカが始まった。

問三 次の文の（ ）にあてはまるもつとも適当な言葉をあとから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 父は大阪へ出張に行ったが、すぐに（ ）した。

② 私がしかられていたら、兄が（ ）をだした。

- |   |       |   |      |   |       |   |       |
|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|
| ア | うなぎ上り | イ | 助け船  | ウ | とんぼ返り | エ | 泣き寝入り |
| オ | 追い打ち  | カ | じだんだ | キ | そぞろ歩き |   |       |